

再考『保育一元化』の道への挑戦

—「保育史からみた西南学院の歩み」による総合的検証—

米 谷 光 弘

On the Unification of the Challenge Road of “Centralized Conservation”:
Comprehensive Validation of “Seinan Gakuin’s Pace
from the Perspective of Conservation History”

Mitsuhiro Yonetani

本研究では、我が国の保育に関わる約150年に及ぶ歴史を紐解くことにより、『保育一元化』・『幼保一元化』・『幼保一体化』の3つの相違点を明らかにし、歴史的・社会的視点に立って、就学前教育における保育理念・保育制度・保育内容・保育方法等の在り方を見直し、これからの保育者養成と保育現場の望ましい保育指導の在り方の示唆を得るため、総合的に再検証することを目的としている。

本テーマである『保育一元化』とは、守屋光雄による保育理念に基づく、理論と実践の両立を目指し、1969（昭和44）年に、幼稚園と保育所の一元施設である北須磨保育センター（神戸市）に設立したことに遡ることができ、西南学院の保育所（早緑子供の園）と幼稚園（舞鶴幼稚園）との関係も、「幼保一元化」への歴史的変遷に影響を受けてきたと推察できる。

今回の『西南学院史』において授業を担当し、「保育史からみた西南学院の歩み」と題し、ライフワークである保育一元化に関する研究を総括する機会が得られ、創立100年の西南学院の歴史と対応させながら授業で紹介することができ、「保育史からみた西南学院の歩み」をテーマとした授業において準備・提供してきたパワーポイントのスライド内容を見直し、総合的に検証し総括する新しい研究の手法を用いることにした。

I はじめに：本研究に至った経緯

この論説では、前編・中編・後編の3部構成であり、今回の前編では、西南学院100年の記念すべき年における西南学院の歴史と西南学院の『幼保の一体化』について、中編では、主にキリスト系の他大学と保育者養成機関（幼児教育系大学）の歴史的変遷について、後編では、保育現場における『幼保一元化』の動向について、それぞれをまとめ直し、戦後の『幼保一元化』論議を中心に、『保育一元化』・『幼保一体化』との共通点と相違点を明らかにしようとする試みである。

したがって、保育者養成と保育現場の望ましい保育指導の在り方の示唆を得るためには、繰り返し総合的に検証しようとする姿勢が大切であり、本稿では『西南学院史』に関わる項目を中心に培われた成果を基に総合的に再検証することにより、今日の保育における最重要課題の『保育一元化』の提言についての方向性を再考していきたい。

保育現場での幼児体育遊びの園児指導は、1972（昭和47）年3月から始まり、神戸市の私立幼稚園、後に私立保育園（所）も含め、毎年、定期的に協力指導園が増え、関西圏だけでなく、岡山、四国等の保育現場へと拡大することができ、幼児体育遊びの実践の師の甲南女子大学元教授故水谷英三先生とともに、台湾を皮切りに、国内外の私立・公立を問わず、大規模園から小規模園まで、直接的・継続的に園児の保育・遊び指導と保育者への研修を今日まで約45年続けられたことは、保育所と幼稚園の法令・制度の違いだけでなく、それぞれの園経営の実態の違いを把握でき、保育に関わる理念・方針・内容・方法に至るまで、実際の保育現場に出向き、比較・検討することができたことは、幼保の相違点を明らかにできる立場でもあり、幸いであった。

また、保育者養成校での講師になったのは、大学卒業し専攻科修了後の1977（昭和52）年4月からであり約40年になり、大学院を修了後、1984（昭和59）年、西南学院大学文学部（人間科学部に改組：2005（平成17）年）児童教育学科に奉職してから約33年目を迎え、その間、国内外の国公私立の専門学校（専修学校も含む）・短期大学・大学（通信制も含む）・大学専攻科・大学院等での教鞭を歴任することができ、大きく成長できたことに感謝している。

大学院当時の指導教官であった恩師兵庫教育大学元教授故守屋光雄先生（文学博士：発達心理学・保育学）は、京都大学（後に母校京大から保育に関する論文に対して、日本で初めての学位を授与される）を卒業し、いくつかの大学で教鞭を執り、立命館大学教授を辞した後、最新の保育理念に基づく、理論と実践の両立を目指し、1969（昭和44）年に、幼稚園と保育所の一元施設である北須磨保育センター（神戸市）を設立した。自ら所長となり、妻のます先生と夫婦一緒に、自然を生かした『遊びの保育』の実践を通しての理論を構築するため、兵庫女子短期大学付属教育研究所所長を兼務しながら、独特な保育実践を積み重ね、新しい独自の『保育学』の理論を確立し、『保育一元化』を提唱した本研究に受け継がれてきたと言っても過言ではない。

今回の『西南学院史』においても「保育史からみた西南学院の歩み」と題し、半期1コマを担当することになり、ライフワークである保育一元化に関する研究を総括する機会が得られ、創立100年の西南学院の歴史と対応させながら授業で紹介することにした。

私が担当する講座を、在外研究中（2014（平成26）年後期：メルボルン大学：MGSE）と国内研究中（2017（平成29）年後期：東京大学発達保育実践政策学センター：CEDEP）の時には、文学部時代からの同僚の人間科学部教授井上哲雄先生（後に、社会福祉学科・心理学科に移籍され、舞鶴幼稚園・早緑子供の園の両園園長経験者）に授業をサポートしてもらった経緯があり、貴重な両園の記録写真を提供していただけたが、2016年度（2017（平成29）年3月31日付）をもって退官される記念すべき、『人間科学論集（井上哲雄教授退官記念号）』に掲載することができなかったことは残念であった。本稿では、授業で紹介した記念誌等で公開した写真を中心に、再度厳選することにより、両園の歴史を検証する上の貴重な資料になったことに深謝したい。

この西南学院史の講義の中では、現在の認定こども園の基盤となる総合施設モデル事業（財団法人こども未来財団の調査研究：2006（平成18）年実施）と平成20年度「幼児教育の改善・充実調査研究」（文部科学省委託研究：2008（平成20）年実施）の2つの全国的な大規模の調査研究事業に取り組むことができた。

特に、2006（平成18）年当時、日本保育学会の常任理事（課題研究委員会委員長）として、保育所・幼稚園に続く、第3の保育施設である総合施設モデル事業（後の認定こども園）関連をテーマとする調査研究事業の研究代表者として、北は北海道から南は九州鹿児島までの全国を網羅し、実際に約250園以上の多種多様な公私立の保育所・幼稚園・認定こども園等の大小規模園を訪問して調査研究に取り組めたことは、これらの研究成果をまとめ直すきっかけとなっている。特に、調査をまとめるにあたり、共同研究者の玉川大学教授山口圭介先生らや協力していただいた多くの方々に感謝したい。

したがって、研究だけでなく教育においても、これまでの保育者養成機関における担当指導教官として、本学や他大学等の保育関連講座（保育原理・保育者論・保育課程総論・保育内容の研究（健康）・保育指導研究法・保育実践（総合）演習・幼児体育概論等）、実技指導を専門とする大阪府立社会事業短期大学（後の大阪府立大学）等の保育体育（遊律）に始まる幼児体育実技基礎・応用等、九州大学等での一般教養での健康科学・スポーツ科学・スポーツ実習等に関する科目から、兵庫教育大学・神戸親和女子大学等の大学院・専攻科での子ども学特論等に至るまで、これまで関わったすべての授業内容の資料や成果を総括することは、今日の保育界の揺れ動く現代保育における重要課題のひとつである『保育一元化』構想への提言として再考することに繋がっていることを願っている。

本研究では、我が国の保育に関わる約150年に及ぶ歴史を紐解くことにより、『保育一元化』・『幼保一元化』・『幼保一体化』の3つの相違点を明らかにし、歴史的・社会的視点に立って、就学前教育における保育理念・保育制度・保育内容・保育方法等の在り方を見直し、これからの保育者養成と保育現場の望ましい保育指導の在り方の示唆を得るため、総合的に再検証することを目的としている。

尚、本稿では、本研究の対象となる『西南学院史』における「保育史からみた西南学院の歩み」をテーマとした授業において準備・提供してきたパワーポイントのスライド内容（約320枚程度：井上哲雄教授の提供も含む）は、以下のP-I～P-Xの10項目である。

保育史からみた西南学院の歩み

人間科学部 児童教育学科
教授 米谷 光弘

S1



(画像は「早稲田大学図書館WEB展覧会第33回」
<http://www.waseda.ac.jp/TENJI/virtual/shozo/>)

S2

P-I 日本の近代教育制度の創始期：

1. 「学制」 発布 ・ 2. 師範学校教育の変遷とその背景 ・
3. 身分によらない学校制度 ・ 4. 高い義務教育の就学率

P-II 保育所・幼稚園概史：

1. 保育所・幼稚園・認定こども園（幼保連携型・幼稚園型・保育所型・地方裁量型）

P-III 保育関連法の重要ポイント：

1. 教育基本法 ・ 2. 児童福祉法 ・
3. 幼稚園教育要領 ・ 4. 保育所保育指針 ・ 5. 教育保育要領 ・ 6. 小学校学習指導要領 ・
7. 子ども・子育て支援新制度（子ども子育て支援3法）

P-IV 保育史関連デジタルアーカイブ：

（ホームページ巡り：ネットサーフィンによる資料収集）

1. キリスト教系大学 ・ 2. 保育者養成（幼児教育系大学）の歴史 ・
3. 創立100年 西南学院 の歩み

P-V 西南学院の幼児教育・保育：（心理学科 井上哲雄教授 提供資料）

1. 舞鶴幼稚園 103年の歩み ・ 2. 早緑子供の園 71年の歩み

P-VI 戦後の「幼保一元化」論議⇒幼保一体化・保育一元化

P-VII 認定こども園関連調査研究：（研究代表者：米谷光弘）

1. 財団法人こども未来財団「総合施設モデル事業調査研究」（平成18年）
2. 文部科学省「幼児教育の改善・充実調査研究」（平成20年）

P-Ⅷ 子ども・子育て支援新制度（認定こども園）：移行への残された課題

1. 認定こども園へ移行するために財政支援等が不十分
2. 省庁間や自治体間の連携が不十分
3. 会計処理や認定申請手続き等の事務手続きが煩雑
4. 制度の普及啓発が不十分

P-Ⅸ 今後の取り組みの具体的課題：

- ①財政支援の充実・②二重行政の解消・③教育と保育の総合的な提供の推進
- ④家庭や地域の子育て支援機能の強化・⑤質の維持・向上への対応

P-X まとめにかえて：

1. 子どもの最善の利益を重視すること
2. 乳幼児期に最もふさわしい生活の場を保障すること
3. 教育・保育の質の維持・向上を目指すこと
4. 家庭や地域の子育て支援機能を評価し、強化すること

この論説では、前編・中編・後編の3部構成にする予定である。

今回の前編では、西南学院100年の記念すべき年における西南学院の歴史（P-Ⅳ・3）と今年度で退官する井上哲雄教授の提供資料を中心による幼保の一体化（P-V）について、次回の中編では、主にキリスト系の他大学（P-Ⅳ・1）と保育者養成機関（P-Ⅳ・2）の歴史の変遷について、最後のまとめである後編では、保育現場における幼保一元化（P-VI）の動向について、以下のスライドのP-Ⅳ～P-VIを中心にとまとめた。

P-Ⅳでは、ネットサーフィンによる 1.キリスト教系大学・2.保育者養成（幼児教育系大学）の歴史・3.創立100年西南学院の歩みについて、保育史関連デジタルアーカイブ（ホームページ巡り）によって得られた情報データを独自に編集し直した。

P-Vでは、西南学院の幼児教育・保育について、1.舞鶴幼稚園103年の歩み・2.早緑子供の園71年の歩みについて、心理学科の井上哲雄教授から「西南学院史」の授業に提供された資料をまとめ直した。

P-VIでは、戦後の「幼保一元化」論議を中心に、保育一元化・幼保一体化との共通点と相違点を明らかにしようとする試みである。

次回の中編では、保育一元化における歴史的背景を明らかにするため、(1) 日本の近代教育制度の創始期(P-I)について、(2) 保育所・幼稚園概史(P-II)について、(3) 保育関連法の重要ポイント(P-III)について、以下のスライドのP-I~P-IIIを中心にまとめた。

P-Iでは、日本の近代教育制度の創始期における1.「学制」発布・2.師範学校教育の変遷とその背景・3.身分によらない学校制度・4.高い義務教育の就学率についての概要をまとめ直した。

P-IIでは、保育所・幼稚園概史における1.保育所・幼稚園・認定こども園(幼保連携型・幼稚園型・保育所型・地方裁量型)のそれぞれの歴史的変遷を紐解き、共通点と相違点について明らかにする試みである。

P-IIIでは、保育関連法の重要ポイントを中心に、歴史的・社会的視点に立って、就学前教育における保育関連法からみた保育理念・保育制度・保育内容・保育方法等の在り方を見直すことの試みである。

最終の後編では、(1) これまで研究代表者として取り組んできた2つの「認定こども園関連調査研究」(P-VII)について、(2) 認定こども園の登場による「子ども・子育て支援新制度」(P-VIII)について、(3) 今後の取り組みの具体的課題を明らかにすることにより、以下のスライドのP-VII~P-IXを中心にまとめた。

P-VIIでは、認定こども園と関連する調査研究(研究代表者:米谷光弘)の1.財団法人こども未来財団「総合施設モデル事業調査研究」(平成18年)と2.文部科学省「幼児教育の改善・充実調査研究」(平成20年)の2つの共同調査研究の報告書を中心にまとめ直す。

P-VIIIでは、「子ども・子育て支援新制度」による認定こども園と従来の保育所や幼稚園を比較検討することにより、移行への残された課題について、1.認定こども園へ移行するために財政支援等が不十分、2.省庁間や自治体間の連携が不十分、3.会計処理や認定申請手続き等の事務手続きが煩雑、4.制度の普及啓発が不十分 等を明らかにする試みである。

P - IXでは、今後の取り組みの対策として、①財政支援の充実・②二重行政の解消・③教育と保育の総合的な提供の推進・④家庭や地域の子育て支援機能の強化・⑤質の維持・向上への対応などの具体的課題を挙げ、保育の望ましい在り方を明らかにする試みである。

したがって、全編（前編・中編・後編）の3部を通して、総合的に評価した結果、まとめにかえてによって、「保育一元化への道」を総括することができるであろう。

特に、最後のスライドのP - Xでは、1.子どもの最善の利益を重視すること。2.乳幼児期に最もふさわしい生活の場を保障すること。3.教育・保育の質の維持・向上を目指すこと。4.家庭や地域の子育て支援機能を充実することにより、子どものために、保育現場を充実し、保育者の保育力を強化することが求められていると考えられる。

つまり、これからの保育者養成と保育現場の望ましい保育指導の在り方の示唆を得るためには、繰り返し総合的に検証しようとする姿勢が大切であり、本稿では『西南学院史』に関わる項目を中心に培われた成果を基に総合的に再検証することにより、今日の保育における最重要課題の『保育一元化』の提言についての方向性を再考していきたいと願っている。

II 西南学院の100年を振り返り

西南学院の起点は、アメリカ南部バプテスト連盟の外国宣教局（ミッション・ボード）からの南部バプテスト派宣教師C. K. ドージャー、G. W. ボールデン、J. H. ロウの3夫妻が、1906（明治39）年9月に来日し、翌年の1907（明治40）年10月に、C. K. ドージャー先生（1879（明治12）年生まれ - 1933（昭和8）年没：米国ジョージア州出身）ら宣教師たちにより福岡バプテスト神学校が開校した時に遡り、1916（大正5）年4月に、C. K. ドージャー先生が設立者となり、福岡市大名町（現在の中央区赤坂）に私立西南学院（旧制男子中学校）を設立に至った経緯がある。

これらの背景には、アメリカからの宣教団は、当初の日本の布教する地域が競合しないように配慮し、東北地区の東北学院（アメリカ・ドイツ改革派）、

関西地区の関西学院（メソヂスト派）、西南地区の西南学院（バプテスト派）と3つに分けたと言われている。

したがって、敗戦国の九州地域を選択したのがバプテスト派であり、統治国アメリカのミッション・ボードの中でも、幸いにも南部バプテスト連盟は金銭的にも余裕があり、西南学院の設立前後における困難な時期には、資金援助の恩恵を受けることができ、今日の礎となったようである。

第2代院長であった創立者C. K. ドージャー先生の遺訓「Seinan, Be True To Christ」“西南よ、キリストに忠実なれ”は、建学の精神として本学の教育に脈々と受け継がれ、1949（昭和24）年には、文科系、社会系総合大学としての新制大学となり、現在、神学部・文学部・商学部・経済学部・法学部・人間科学部・国際文化学部の7学部、大学院7研究科（修士・博士課程）を有し、保育所（早緑子供の園：国児園1945（昭和20）年-）・幼稚園（舞鶴幼稚園：1913（大正2）年-）・小学校（2010（平成22）年-）・中学校（1947（昭和22）年-）・高等学校（1948（昭和23）年-）から学園の組織として構成した。

西南学院は、今年1916（大正5）年に設立されてから100年目を迎え、建学の精神を基盤としながら、4つのL（キリスト教的理念）「Peace（平和）」「Life（生命尊重）」「Love（人類愛）」「Liberty（自由）」から導きだされた教育理念と教育目標を掲げ、保育所・幼稚園・小学校・中学校・高等学校・大学・大学院を有するキリスト教（プロテスタント派）の私立総合学園として発展でき、その中でも、大学は、西日本における私立文系大学の雄として堅実に歩んでいて、今年の2016（平成28）年は、学院創立100周年の節目の年に当たる。

Ⅲ 西南学院史における児童教育学科の位置づけ

記念事業の一環として、2009年前期より、全学の臨時開講科目の『西南学院史講義』の開講に取り組み、各学部間を超え、それぞれの専門分野の立場からオムニバス形式で、「保育史からみた西南学院の歩み」と題し、人間科学部・児童教育学科の教授として、授業を受け持つことになった。所属する児童教育学科の前身は、モード・ドージャー夫人（アメリカ南部バプテスト連盟派遣宣教師：創業者C. K. ドージャー氏の妻）がキリスト教に基づく女子教育を行うため、西南学院高等学部神学科内女子部（1935（昭和10）年）を皮切りに、学院から分離後改称した西南女子神学塾を経て、敗戦後の短期大学の母体となった西南保姆学院（1940（昭和15）年 -）、さらに、福岡保育専攻学校（1944（昭和19）年：改称）の児童教育学科に遡ることができる。（『日本バプテスト連盟五十年史』）

このように、宣教活動の一環として、夫婦一体となって、教育・福祉・医療・芸術活動に関わることにより、布教という普及・振興の輪を広げることが常道であり、発展途上国と同様に、敗戦下の日本国にとって、献身者としての女子教育や子ども教育の重要性は言うまでもなく、神学だけでなく、英語による語学教育・女性に向けた仕事とされていた幼児教育と福祉・医療と看護などがキーワードであり、男子学生の牧師養成やクリスチャンファミリーの育成にとっても大きな意味を持っていたと考えられる。

したがって、西南学院が活水女学院とともに、九州で初めての保姆（幼稚園の教諭を指し、保育所では保母と呼ぶ：現行の保育士）養成機関となったことも、全国各地のキリスト教主義の明治以降の旧制の学校、戦後の新制大学においても神学教育と女子教育は表裏一体であり、国際化に向けた英語による語学教育を中心に、男性には、復興へのビジネス等の企業家や都市開発等の専門家の養成を目指し、女性には、幼児教育の幼稚園・保育所（託児所）・児童福祉施設・医療看護施設の従事者の養成を目指し、青年・家族・子どもの領域まで関わろうとしていることに気づくであろう。

設立時の西南学院の保育者養成機関は、保育所と幼稚園のあった同じ鳥飼地区に校舎があり、園児と保育者志望学生との交流が日常的に実施できる環境と

して最適であった。その後の西南学院大学短期大学部児童教育科として、保育士資格と幼稚園教諭免許（当時は2級）が取得できる短期大学（1950（昭和20）年 - 1975（昭和50）年）に昇格し、4年制大学（1974（昭和49）年 - ）として、西南学院大学所在地の西新地区に移転してからは、当時、児童教育学科の授業の中心となっていた旧6号館（現在の言語教育センター）のことを俗称“女の館”と呼び、保育士資格と幼稚園教諭免許（1種）が取得できるようになったが、以前のように、日常生活の中で継続的に園児と学生との実践的な交流ができなくなったことは残念なこととして挙げられる。

黎明期

発展と成熟時代を経て、21世紀への飛翔

1950年
 西南学院大学短期大学部児童教育科（編入保育専攻学校を母体）、英語科と商科（専門学校第二部を母体）が開設（1974年まで）。（写真）鳥飼にあった短期大学部児童教育科の校舎 → 六号館（女の館）

1987年
 博多築地立地の74,000㎡（百道浜校地）を取得。（写真）上空から見た西南学院と新に取得した百道浜校地

2002年
 舞鶴幼稚園・早稲子供の園舎

2007年
 西南学院大学と福岡市の協働事業として、子育て支援施設である子どもプラザを開設



S5

1974年(昭和49年)
 文学部児童教育学科開設
 （短大児童教育科は翌年廃止）

1985年(昭和60年)
 文学部児童教育学科に、小学校教諭免許課程設置(初の男子学生が入学)

1999年(平成11年) 西南学院大学開学50周年記念式典を挙行

2001年(平成13年)
 文学部社会福祉学科増設

2005年(平成17年)
 人間科学部児童教育学科 及び
 社会福祉学科設置

2012年(平成24年) 心理学科設置

S6

しかし、1984（昭和 59）年に文学部児童教育学科に着任した翌年の 1985（昭和 60）年には、小学校教諭免許（1 種）の取得が可能になり、男女共学の歴史が始まった。その後、学校図書館司書教諭・博物館学芸員の資格・免許の取得ができるようになった。今後は、保育教諭（仮称）や英語免許との関連、医療資格との関係が急務である。

さらに、文学部に社会福祉学科（2001（平成 13）年 - 現在に至る）が加わり、児童教育学科とともに、人間科学部（2005（平成 17）年 - 現在に至る）として改組・独立を果たした。現在は、設立時の定員を縮小したものの、社会福祉士・精神保健福祉士の国家試験受験資格・社会福祉主事（任用資格）・保育士・高等学校教諭一種（公民・福祉）・学校図書館司書教諭・博物館学芸員の資格・免許の取得が可能となっている。

人間科学部の新学科として、心理学科（2012（平成 24）年 - 現在に至る：認定心理士・博物館学芸員の資格の取得可能）が増設され、設立時の認知心理学分野中心という方向性から臨床心理学分野への拡充の道を模索しながら、運命共同体として 1 学部 3 学科となり、人間科学研究科の大学院（博士課程前期・後期課程）を有する組織として今日に至っている。

人間科学部では、学科ごとに特色があり、将来、学生の進路を決定づけるために必要となる以下の免許・資格を取得するために、関係科目を提供している。

学校教育法（1947（昭和 22）年法律第 26 号）による学校とは、一条校として、幼稚園、小学校、中学校、義務教育学校（小中一貫教育校：2015（平成 27）年改正）・高等学校（全日制・定時制・通信制課程の学科・別科・専攻科）、中等教育学校（中高一貫教育校：1998（平成 10）年改正）、特別支援学校（視覚障害者（弱視者に至ることもある）、聴覚障害者（難聴者に至ることもある）、知的障害者、肢体不自由者または病弱者（身体虚弱者を含む）、大学（学部・別科・専攻科・大学院・短期大学）及び高等専門学校があり、他に、専修学校（専修学校：1975（昭和 50）年改正）・高等専修学校・専門学校・各種学校）をさしている。

児童教育学科では、その中の幼稚園と小学校に関連する幼稚園教諭及び小学校教諭普通免許状（二種：短期大学卒業相当・一種：大学卒業相当・専修：大学院修了相当）のうち、一種免許状を取得できることが可能である。

また、児童福祉法（1947（昭和22）年法律第164号）に関する事業を行う各種の施設である児童福祉施設として、第7条に、助産施設、乳児院（かつての孤児院：呼称変更）、母子生活支援施設（かつての母子寮：呼称変更）、保育所、幼保連携型認定こども園、児童厚生施設（児童遊園・児童館）、児童養護施設、障害児入所施設、児童発達支援センター（福祉型・医療型）、情緒障害児短期治療施設（児童心理治療施設：2017（平成29）年改正）、児童自立支援施設及び児童家庭支援センターが挙げられる。

児童教育学科と社会福祉学科では、従来の保育所だけでなく、幼保連携型認定こども園をはじめ、乳児院、児童養護施設、児童発達支援センターなどで従事できる国家資格の保育士が取得できるようになった。

一方の幼稚園は、学校教育法に基づき、満3歳以上の幼児に対して就学前教育を行うことを目的とする施設であり、幼稚園教諭は、東京女子師範学校付属幼稚園などでの呼称の保姆に始まり、1891（明治23）年の小学校令、1926（大正15）年の幼稚園令の規定では女性に限定された保姆と呼ばれていたが、戦後の1947（昭和22）年の学校教育法で廃止され、男女問わず保育に従事できる幼稚園教諭となった経緯がある。

他方の保育所（児童福祉法第39条）は、保護者の委託を受けて、保育に欠けるその乳児又は幼児を保育することを目的とする通所の施設とされ、従来の託児所では、当時の幼稚園と同様に、資格のない保姆を使っていたが、その後、呼称は同じである保母の書き方が一般的となり、極少数の経営者や管理職の男性を除き、長い間、女性だけの職業社会であったと言えるであろう。しかし、男性（俗称保父）が職業として保育に従事を希望するようになり、1977（昭和52）年の児童福祉法施行令第22条改正により、「児童の保育に従事する男子について準用する」ことが認められ、保育現場で活躍する男性保育者が増え続けた。

したがって、保育士も、1985（昭和 60）年男女雇用均等法が成立し、男女平等社会において、看護師・保健師・助産師など同様に、社会的に認知されていった。その結果、1999（平成 11）年 4 月の児童福祉法の改正により、男女共通の国家資格としての保育士（2003（平成 15）年施行）が正式名称として使用されるようになった経緯がある。

ここで特筆されることは、2006（平成 18）年に成立した「就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律」であり、従来の厚生労働省（以前の厚生省）の管轄の児童福祉施設の保育所と文部科学省（以前の文部省）の管轄の学校教育施設の幼稚園との機能を併せ持つ内閣府主管の認定こども園（内閣府の主管：幼保連携型・保育所型・幼稚園型・地方裁量型）の設置が可能となったことである。

これまでの保育所の入所条件「保育に欠ける」概念は、保護者の共働きが主な入所理由であったが、時代のニーズの要望により、就労していなくても、一時的に、出産の前後、疾病負傷等、介護、災害の復旧、通学等の理由でも拡大解釈して受け入れることが可能となった。今日の少子少産化社会とはいえ、女性の社会進出が拍車をかけ、これまでは、学校教育法に基づき、満 3 歳以上の幼児に対して就学前教育を行うことを目的とする幼稚園に入学するまで、家庭で養育していた幼児層を含め、早くから就学前施設において、集団における保育活動を希望する保護者が増えたことから、地域によっては待機児童対策が急務とされ、政府や地方自治体の財政圧迫による補助金や交付金等の削減が見込まれることから、園経営にとっても、認定こども園への移行が余儀なくされているのが現状である。

したがって、児童教育学科において、この 2012（平成）24 年に成立した「改正認定こども園法」（就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律の一部を改正する法律：2014（平成 24）年法律第 66 号）により、幼保連携型認定こども園が創設されたことは、学科の将来構想の大きな柱となるであろう。

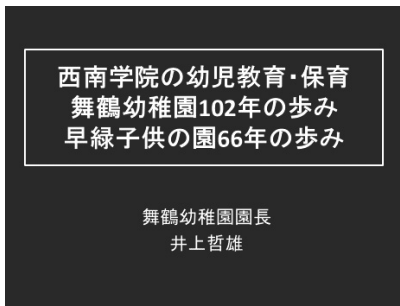
この幼保連携型認定こども園では、児童福祉施設（保育所）と学校教育施設（幼稚園）を一体化することにより提供する子ども・子育て支援の施設であるため、新しい保育教諭免許は、保育士資格（国家資格：2003（平成15）年11月施行）と幼稚園教諭免許の両方を併用することが必要となることから、保育教諭免許取得のカリキュラム再編成は、児童教育学科としての今後の重要な課題である。

心理学科においても、国家資格の公認心理師法が2015（平成27）年9月9日に国会で成立し、9月16日に公布されたことから、これまでの臨床心理士を始めとする認定資格と異なり、国家資格となった公認心理師を取得できるかどうか重要な学科存続の道であろう。

しかしながら、学校現場では、少子化による園児や生徒の減少と同時に、各年度の学校教員の退職者が減少し、採用試験での合格者が頭打ちになることが予想され、数年後は小学校、十数年後は幼稚園の採用が困難となることは明らかであり、全国的な傾向と言える。

これからは、他学部・他学科の壁を越え、単位互換による免許・資格が取得できるようにする体制づくり、他の学問分野（医療・情報科学等）との融合による新しい資格の提供、就職先を九州だけでなく、関東・関西、さらに海外へ進出することが求められると考えられる。

IV 西南学院における幼保一体化への曲り角



S7



S8

ここでは、井上哲雄教授の『西南学院史』「保育史からみた西南学院の歩み」の授業で、紹介したスライド（P - V 西南学院の幼児教育・保育：（心理学科 井上哲雄教授 提供資料）：2015（平成27）年授業当時：1.舞鶴幼稚園102年の歩み・2.早緑子供の園66年の歩み）を掲載することにより、現在2016（平成28）年、舞鶴幼稚園は103年の歩みと早緑子供の園は71年の歩みを続けている歴史の重みに敬意を表し、西南学院の百年史の中で、保育史を築き上げてきた両園を比較しながら時系列に顧みることにする。

【西南学院 舞鶴幼稚園の歩み：幼稚園の場合】 <上段>

保育現場も同様に、一方の幼稚園は103年前に、前身の南部バプテスト宣教団の舞鶴幼稚園（荒津：1913（大正2）年 - →地行浜：1920（大正10）年 - ）に始まり、福岡浸礼教会（地行：1933（昭和8）年 - 1940（昭和15）年）・西南学院保姆学院（福岡保育専攻学校：地行：1940（昭和15）年 - 1951（昭和26）年）を経て、早緑幼稚園（鳥飼：1941（昭和16）年 - 1951（昭和26）年）との統合したのである。

1. 前史（1901（明治34）年 - 1913（大正2）年）

1901（明治34）年に、福岡浸礼教会（現福岡バプテスト教会）を創設し、宣教師 C. K. ドージャーらの来日ともに、福岡夜学校を開設した。

1906（明治39）年 C. K. ドージャー、G. W. ボールデン、J. H. ロウの三組の夫妻、1907（明治40）年に「福岡神学校」を開講し、1911（明治44）年に、大名町の「福岡夜学校」では、英語を教えながら、聖書の福音伝道の目的で開設している。

前史 (1901(明治34)年～1913(大正2)年)

- 1901(明治34)年福岡浸礼教会(現福岡バプテスト教会)創設
《宣教師C.K.ドージャーらの来日と福岡夜学校の開設》
- 1906(明治39)年C.K.ドージャー、G.W.ポールデン、J.H.ロウの三組の夫妻、1907「福岡神学校」
- 1911(明治44)年に、大名町に「福岡夜学校」
英語を教えながら、聖書の福音伝道の目的で開設

S9

2. 第1期 南部バプテスト宣教団による直接経営の時代

(1913(大正2)年 - 1933(昭和8)年)

舞鶴幼稚園の創設は、1913(大正2)年であり、初代園長：グレース・H・ミルズであり、「イエス様を多くのお友達に紹介することが一番大きな目的です。」と記されている。

荒戸時代では、西公園下民家で保育をし、第四代園長のS. F. フルジウム(音楽家)がなった。

地行の海辺において、1921(大正10)年に、地行東町298番地(通称地行四番丁、元の大学女子寮汀寮の場所)で保育をしていた。

第1期 南部バプテスト宣教団による直接経営の時代 (1913(大正2)年～1933(昭和8年))

- 《舞鶴幼稚園の創設》1913(大正2)年初代園長
グレース・H・ミルズ
- 「イエス様を多くのお友達に紹介することが一番大きな目的です。」
- 《荒戸時代》西公園下民家 第四代園長の
S.F.フルジウムFulghum(音楽家)
- 《地行の海辺》1921(大正10)年地行東町298番地
(通称地行四番丁、元の大学女子寮汀寮の場所)

S10

1913(大正2)年《荒戸時代》西公園下民家
初代園長グレース・H・ミルズ



S11

1915(大正4)年第1回卒園式
中列の証書を持つのが卒園生



S12

1915(大正4)年頃の教室での
フレーベルの恩物での保育風景(ミルズ園長)



S13

1919(大正8)年頃
西公園で輪になってお遊戯



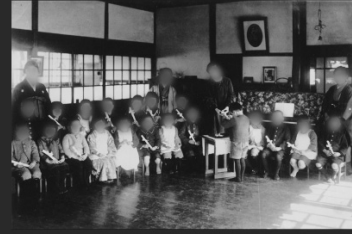
S14

1921(大正10)年《地行の海辺》
フルジウム園長と



S15

大正終わり頃 フルジウム園長から
卒園証書を(園児の服装が洋服に)



S16

大正終わり頃 地行東町舞鶴幼稚園
園庭での運動会綱引き



S17

1928(昭和3)年
クリスマス・ページェント(ポールデン園長)



S18

以上のスライドでは、和服から洋装への子どもの衣服の変化が読み取れ、西洋文化が保育の導入によって、幼児期の子どもの頃から浸透していく様子が伺える。当時の保育の主流であったフレーベルの恩物がみられ、近くの公園や海辺での園外保育では輪になってのお遊戯する姿が見られ、この頃は、まだ着物やエプロン姿の子がほとんどである。また、幼稚園での運動会の綱引きは、かけっこ玉入れと並び定番であり、当時から人気があったようである。特に、キリスト教の宗教保育におけるクリスマスのページェントは、伝統のある行事であった。

3. 第2期 福岡浸礼（バプテスト）教会への移管の時代

（1933（昭和8）年 - 1940（昭和15）年）

1929（昭和4）年世界の大恐慌の影響で、世界不況が起こり、宣教団ボードの補助が削減され、日本における幼稚園経営にも多大な影響を受け、苦しくなってきた。

その後、1933（昭和8）年幼稚園経営を福岡浸礼（バプテスト）教会へ移り、日本人園長の園長下瀬加守牧師が登場し、井上トク先生らが保育をしている。

第2期 福岡浸礼（バプテスト）教会への 委管の時代 （1933（昭和8）年～1940（昭和15）年）

《世界不況と宣教団ボードの補助削減》1929
（昭和4）年世界の大恐慌

《日本人園長の登場》1933（昭和8）年幼稚園経営を福岡浸礼（バプテスト）教会へ

・ 園長下瀬加守牧師、井上トク



S20



S21



S22



S23



S24



S25

幼児の円形でのお遊戯「かごめかごめ」や大型積み木などで遊んでおり、絵話（紙芝居風）による指導もあり、動と静の遊びにより、保育課程は構成されていたようである。また、クリスマスの水兵姿の敬礼の様子やお遊戯会のドレス姿等、欧米の幼児教育の影響が大きいと考えられる。しかしながら男の子は坊主頭、女の子はおかっぱ頭と決まっており、画一斉保育が展開されていたことが推察される。

4-1. 第3期 保母養成機関へ付託管理の時代

(1940(昭和15)年 - 1950(昭和25)年)

当時の世の中は、戦争(第2次世界大戦)への傾斜することにより、宣教師たちの日本退却は、余儀なくされたことは不幸な出来事であった。

1940(昭和15)年には、九州で初めての保育者養成の西南保母学院を開設し、院長には、下瀬加守先生が選任された。

ここでの教育目的として、「単に幼稚園或は託児所保母の養成に止まらず、真の基督者を養成して、主の奉仕をなし得る婦人を社会に送り出すこと」を掲げ、キリスト教の宣教を主体とした婦人教育を担っていたことが伺える。

M. B. ドージャー夫人の強い誘いにより、活水女学院出身の宣教師婦人であり、着任前は、神戸で幼稚園を開設していた福永津義先生が保育科主任として就任し、舞鶴幼稚園の第8代園長(1940(昭和15)年 - 1960(昭和35)年)となり、「おばあちゃん先生」と呼ばれた。

第3期 保母養成機関へ付託管理の時代 (1940(昭和15)年～1950(昭和25)年)

《戦争への傾斜》宣教師たちの日本退却
《西南保母学院の開設》1940(昭和15)年 院長 下瀬加守

- 教育目的「単に幼稚園或は託児所保母の養成に止まらず、真の基督者を養成して、主の奉仕をなし得る婦人を社会に送り出すこと」
- M. B. ドージャー夫人の強い誘いで、福永津義が保育科主任として就任
- 舞鶴幼稚園の第8代園長(1940-1960年)「おばあちゃん先生」

S26

第3期 保母養成機関へ付託管理の時代 (1940(昭和15)年～1950(昭和25)年)

《西南保母学院の鳥飼校舎完成と早緑幼稚園の設置》1941(昭和16)年

- 鳥飼の樋井川に沿った土地、第二附属園早緑幼稚園(～1951昭和26年まで)

《戦いの中での保育》

- 1944(昭和19)年西南保母学院から福岡保育専攻学校へと名称変更
- 1945(昭和20)年「早緑子供の園」の前身「早緑国児園」が始まった。

S27

1941(昭和16)年には、西南保母学院の鳥飼校舎完成と同じ敷地内の早緑幼稚園が設置され、鳥飼の樋井川に沿った土地に、第二附属園早緑幼稚園(-1951(昭和26)年まで)が設立され、戦いの中での保育が続けられ、1944(昭和19)年には、西南保母学院から福岡保育専攻学校へと名称が変更された。また、1945(昭和20)年「早緑子供の園」の前身の戦争孤児のための「早緑国児園」が始まった。

1943(昭和18)年早緑幼稚園第2回
卒園式(西南保母学院)

S28

1944(昭和19)年テラス、滑り台にて



S29

1944(昭和19)年頃ホールでのスキップ



S30

1947(昭和22)年舞鶴幼稚園第33回
卒業生

S31

以下、舞鶴幼稚園の歩みに続き、早緑子供の園（保育所）が約30数年後に誕生した。比較検討を容易にするため、上段に舞鶴幼稚園の歩み、下段に早緑子供の園の歩みの歴史をできるだけ忠実に再現するため、両園の園長経験者の井上哲雄先生（現名誉教授）のパワーポイントを時系列に並べて、紹介した。

【西南学院 早緑子供の園の歩み：保育所の場合】＜下段＞

4-2 創設期の早緑子供の園の誕生（前身）

他方の保育所は71年前に、国児園（1945（昭和20）年 - 1948（昭和23）年）と称し始まり、以前の早緑子供の園（1949（昭和24）年 - 1951（昭和26）年）を経て、それぞれの歴史を歩んできた中で、両園は、1951（昭和26）年に、西南学院の組織の一員となった経緯がある。早緑子供の園については、以前から全国唯一の学校法人保育所としての特筆できる存在であった。

早緑子供の園65年の歩み

1. 国児園時代 (1945(昭和20)年～1947(昭和22)年)

- 1945(昭和20)年9月福岡保育専攻学校 校舎の一部で戦災孤児4名・引揚げ孤児5名・要救護家庭児3名(昼夜)(12名)を收容し、「早緑国児園」を設置、1947(昭和22)年10月廃止。(累計65名が收容され、養子として引き取られて行った。)
- 1948(昭和23)年3月勤労母性の昼間受託のみ

S32

1945(昭和20)年秋 国児園の子供たち



S33

5-1. 第4期 学校法人西南学院への移行時代

(1950(昭和25)年 - 1963(昭和38)年)

1950(昭和25)年には、平和がよみがえった戦後の再建がなされ、学校法人西南学院への組織内へ移行した。「西南学院大学短期大学部児童教育科」として、舞鶴幼稚園も西南学院の組織へ組み込まれることになった。

1949(昭和24)年、早緑子供の園保育所に認可され、1951(昭和26)年、学校法人西南学院の施設となり、日本バプテスト連盟「神学部・児童教育科評議員会」による運営(-1974(昭和49)年)となった。

短大の役職「附属園主事」の新設、初代故高橋さやか先生(西南女学院短期大学元学長・活水女学院元院長)による舞鶴幼稚園独自の「保育年間カリキュラム」が作成された。

第4期 学校法人西南学院への移行の時代 (1950(昭和25)年～1963(昭和38)年)

《平和がよみがえった戦後の再建》

《学校法人西南学院への組織内へ》1950(昭和25)年
「西南学院大学短期大学部児童教育科」へ、
舞鶴幼稚園も西南学院の組織へ

- 1949(昭和24)年、早緑子供の園保育所認可1951年学校法人西南学院の施設
- 日本バプテスト連盟「神学部・児童教育科評議員会」による運営(～1974年)
- 短大の役職「附属園主事」の新設、初代高橋さやか・舞鶴幼稚園独自の「保育年間カリキュラム」が作成

S34

第4期 学校法人西南学院への移行の時代 (1950(昭和25)年～1963(昭和38)年)

《舞鶴幼稚園鳥飼園舎の新築》1951(昭和26)年

「ファーマー・ハウス」新園舎に舞鶴幼稚園は移転、
早緑幼稚園の統合。 電車のお部屋、人形の家
《鳥飼バプテスト教会の設立》「みのり会」(⇒父母礼拝)

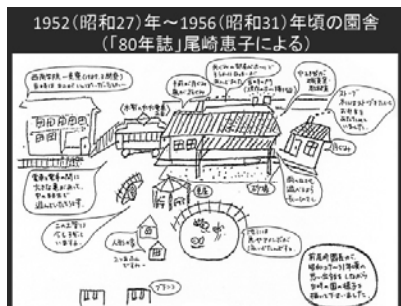
- 1956(昭和31)年鳥飼バプテスト教会組織化
- 《創立50周年と苦難の60年代》
- 1960(昭和35)年福永津義先生の定年退職
- 1960(昭和35)年4月E.B.ドージャー園長、岩城富美子主事
- 1963(昭和38)年6月集中豪雨樋井川氾濫床上浸水
- 10月短大児童教育科西新校地へ移転
- 11月創立50周年記念行事記念誌『わたしたちのまいつようちえん、50周年』

S35

1951（昭和26）年に、舞鶴幼稚園の鳥飼園舎の新築がされ、「ファーマー・ハウス」は、新園舎に舞鶴幼稚園は移転し、早緑幼稚園を統廃合した。



S36



S37



S38

電車のお部屋、人形の家等ができ、鳥飼バプテスト教会が設立され、父母礼拝のための「みのり会」が誕生した。1956（昭和31）年に、鳥飼バプテスト教会が組織化された。



S39



S40



S41



S42



S43



S44

創立 50 周年と苦難の 60 年代を乗り越え、1960（昭和 35）年に、福永津義先生の定年退職し、1960（昭和 35）年 4 月に、E. B. ドージャー園長、岩城富美子主事となる。

1963（昭和 38）年 6 月に、集中豪雨樋井川が氾濫し床上浸水となり、10 月には、短大児童教育科西新校地（6 号館：俗称は、女の館）へ移転する。11 月に、創立 50 周年記念行事記念誌『わたしたちのまいづるようちえん、50 周年』を刊行した。

5-2 児童福祉法による認可を受け発足の前期

(1949 (昭和 24) 年 - 1955 (昭和 30) 年)

1949（昭和 24）年 6 月児童福祉法による認可を受け、早緑子供の園が発足し、早緑幼稚園を保育園（定員幼児 100 名、乳児 10 名）に切替えた。園長福永津義、主事堀江キヨ、乳児部前田末子他が保母（現在の保育士）となり、ア

メロカよりの救援物資で給食を開始し、共同募金・バプテスト連盟による資金援助で10月乳児宿舎ができた。

1951(昭和26)年学校法人西南学院経営の保育所(幼児25名、乳児10名)となり、園長福永津義、主任中川のぶ(現名誉教授)がなった。

1954(昭和29)年に、定員変更60名(幼児40名、乳児20名)となり、優秀保育所表彰、モデル保育所となり、園児の家庭は、日雇い労働者、母子家庭(保育料全額免除)への対応がなされた。

2. 児童福祉法による認可をうけ発足

(1) 前期(1949(昭和24)年~1955(昭和30)年)

- 1949(昭和24)年6月児童福祉法による認可をうけ、早緑子供の園が発足。早緑幼稚園を保育園に切替え、園長福永津義、主事堀江キヨ、乳児部前田末子他、(定員幼児100名、乳児10名) アメリカよりの救援物資で給食
- 10月乳児宿舎(資金援助は共同募金、バプテスト連盟)
- 1951(昭和26)年学校法人西南学院経営の保育所となる。園長福永津義、主任中川のぶ(幼児25名、乳児10名)
- 1954(昭和29)年定員変更60名(幼児40名、乳児20名) 優秀保育所表彰、モデル保育所
- 園児の家庭 日雇い労働者、母子家庭(保育料全額免除)

S45

1945(昭和20)年秋 国児院の子供たち



S46

1949(昭和24)年からの園舎



S47



舞鶴園庭で西南学院大学の実習生と遊ぶ園児。
後ろの建物は西南学院大学の女子寮。

1954(昭和29)年

S48



七夕の笹かざりを樋井川に流しに行く。

1955(昭和30)年7月

S49



ひなまつり 福永津義園長と先生方、7人の5歳児たち。
手作りのおひなさまの前で。

1955(昭和30)年3月3日

S50

5-3. 児童福祉法による認可を受け発足の後期

(1956 (昭和31)年 - 1962 (昭和37)年)

短大卒業生が保母（現在の保育士）に就職し、経験豊かな保母たち（永野キクなど）と協力し、キリスト教保育の実践を通して、短大の実習園としても指導的役割を果たした。

毎年の研修会などで研究発表（給食、保育、放送教育など）を実施した。

1960（昭和35）年に、福永津義先生が定年退職した後の園長は、E. B. ドージャーから三好敏夫に代わり、その後、M. E. ドージャー園長（1961（昭和36）年 - 1963（昭和38）年）が交代した。

昭和30年代後半に、保育事情の変化に伴い、西新町に保育所を設け、措置児も夫婦共稼ぎ家庭が増加した。

1963（昭和38）年6月には、集中豪雨により、樋井川が氾濫して床上浸水の被害にあった。

2. 児童福祉法による認可をうけ発足
(2) 後期 (1956 (昭和31)年～1962 (昭和37)年)

- ・ 短大卒業生が保母に就職、経験豊かな保母たち（永野キクなど）と協力し、キリスト教保育の実践が、短大の実習園としても指導的役割を果たす。
- ・ 毎年研の研修会などで研究発表（給食、保育、放送教育など）
- ・ 1960 (昭和35)年福永津義先生の定年退職
- ・ 園長の交代 (E.B.ドージャー⇒三好敏夫⇒)M.E.ドージャー園長 (1961 (昭和36)～1963 (昭和38)年)
- ・ 昭和30年代後半 保育事情の変化 西新町に保育所、措置児も夫婦共稼ぎ家庭が増加
- ・ 1963 (昭和38)年6月集中豪雨樋井川氾濫床上浸水

S51

1959 (昭和34)年お月見会
うさぎのダンス

S52

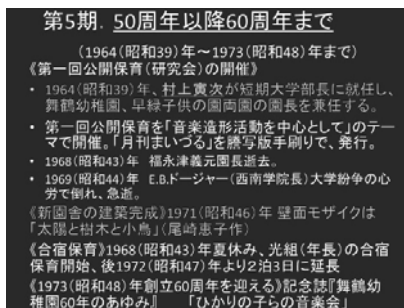
1962 (昭和37)年樋井川への散歩



S53

6-1. 第5期 50周年以降60周年まで

(1964 (昭和 39) 年 - 1973 (昭和 48) 年)



S54

第一回公開保育(研究会：テーマ「音楽造形活動を中心として」)が開催され、1964(昭和39)年、村上寅次が短期大学部長に就任し、舞鶴幼稚園、早緑子供の園両園の園長を兼任する。

「月刊まいづる」を謄写版手刷りで発行する。

1968(昭和43)年に、福永津義元園長が逝去し、1969(昭和44)年に、E. B. ドージャー(西南学院長)が大学紛争の心労で倒れ、急逝した。



S55



S56



S57

1968(昭和43)年の夏休みに、合宿保育が実施され、光組(年長)の合宿保育開始、後1972(昭和47)年より2泊3日(阿蘇合宿)に延長した。



S58



S59

1971(昭和46)年に、新園舎の建築完成し、壁面モザイクは「太陽と樹木と小鳥」(西南学院大学名誉教授：尾崎恵子作)である。



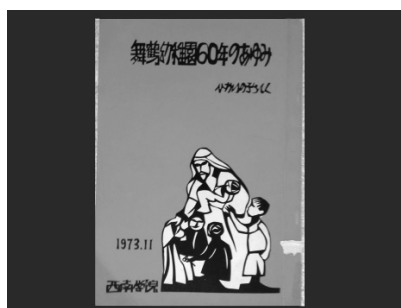
S60



S61



S62



S63



S64

1973(昭和48)年に、創立60周年を迎え、記念誌『舞鶴幼稚園60年のあゆみ』を刊行し、「ひかりの子らの音楽会」を開催した。

6-2. 短大、西南学院校地への移転

(1963(昭和38)年 - 1971(昭和46)年)

1963(昭和38)年10月に、短大西新校地へ移転し、1964(昭和39)年に、村上寅次(現名誉教授)が短期大学部長に就任、舞鶴幼稚園、早緑子供の園両園の園長を兼任する。入園希望者の増加と乳児保育の生後2-3ヶ月児の希望者が増加した。

1969(昭和44)年に、福岡市で「虫菌のない児童」97%の優秀保育所として、西日本新聞に掲載される。

3. 短大、西南学院校地への移転

(1963(昭和38)年～1971(昭和46)年まで)

- ・ 1963(昭和38)年10月短大西新校地へ移転
- ・ 1964(昭和39)年、村上寅次が短期大学部長に就任、舞鶴幼稚園、早緑子供の園高園の園長を兼任する
- ・ 入園希望者の増加、乳児保育(生後2、3ヶ月児)の希望者増加
- ・ 1969(昭和44)年福岡市で虫歯のない児童97%優秀保育所として西日本新聞に
- ・ 1970(昭和35)年干隈「山の家」にて年長児合宿
→1971(昭和36)年早緑園舎
- ・ 1971(昭和36)年大学のプレハブを移転し、プレハブ園舎

S65

1966(昭和41)年 1歳児と遊動円木



S66

1966(昭和41)年クリスマス・ページェント(舞鶴幼稚園のホールにて)



S67

1969(昭和44)年卒園式(中村弘園長)



S68

1969(昭和44)年感謝祭



S69

1970(昭和35)年干隈「山の家」にて年長児合宿

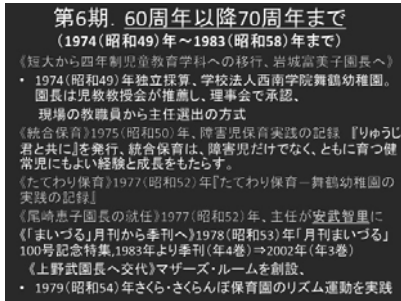


S70

1970(昭和45)年からの干隈「山の家」にての年長児合宿は、1971(昭和36)年に、早緑園舎に変更した。1971(昭和46)年には、大学のプレハブを移転し、プレハブ園舎としている。

7-1. 第6期 60周年以降70周年まで

(1974(昭和49)年 - 1983(昭和58)年)



S71

短大から四年制児童教育学科への移行し、岩城富美子(現名誉教授)が園長に就任した。1974(昭和49)年には独立採算となり、学校法人西南学院舞鶴幼稚園となった。園長は児教教授会が推薦し、理事会で承認し、現場の教職員から主任選出の方式となった。

統合保育の実践の成果として、1975(昭和50)年には、障害児保育実践の記録『りゅうじ君と共に』を発行した。統合保育は、障害児だけでなく、ともに育つ健全児にもよい経験と成長をもたらすことを明らかにしている。



S72

1977(昭和52)年 お父さんにとってもらった
竹馬で行進する光組(年長児)



S73

たてわり保育 1972(昭和47)年より開始



S74

1972(昭和47)年より開始した「たてわり保育」の実践の成果として、1977(昭和52)年には、『たてわり保育—舞鶴幼稚園の実践の記録』を発行した。

月組(年中)お泊り保育1975年より
1981(昭和56)年より園舎に1泊



S75



1979(昭和54)年
さくら・さくらんぼ保育園
のリズム運動を実践



S76



1983年(昭和58年)70周年記念式典

S77

1974(昭和49)年阿蘇 光組夏のキャンプ



S78



S79



S80



S81

1977（昭和52）年に、尾崎恵子園長が就任し、主任が安武智里になった。

1978（昭和53）年に、「まいつる」月刊から季刊へ移行した。「月刊まいつる」100号記念特集、1983（昭和58）年より季刊（年4巻）となり、2002（平成14）年には、季刊（年3巻）となった。

上野武園長（現名誉教授）へ交代し、マザーズ・ルームを創設した。1979（昭和54）年には、さくら・さくらんぼ保育園のリズム運動（斎藤公子先生）の実践を開始している。

7-2. 園舎改築より30周年まで

（1972（昭和47）年 - 1979（昭和54）年）

1973（昭和38）年12月に、新園舎竣工式（コンクリート1階建て、屋根の

上の鳩)を挙げる。

1974(昭和39)年に、短大児童教育科から四年制児童教育学科へ移行した。

1976(昭和41)年に、中川のぶ(1951(昭和26)年より主事、園長(1987(昭和62)年3月まで)となり、初代主任保母水町祐子が担当した。

1978(昭和53)年に、第1回なつまつり実施した。

1979(昭和54)年には、創立30周年記念式典『早緑子供の園30年のあゆみ—あいされるこども』発行された。

4. 園舎改築より30周年まで

(1972(昭和47)年~1979(昭和54)年)

- 1973(昭和38)年12月新園舎竣工式 コンクリート1階建て、屋根の上の鳩
- 1974(昭和39)年短大児童教育科から四年制児童教育学科への移行
- 1976(昭和41)年園長に中川のぶ(1951(昭和26)年より主事、園長は1987(昭和62)年3月まで)、初代主任保母水町祐子
- 1978(昭和53)年第1回なつまつり実施
- 1979(昭和54)年創立30周年記念式典『早緑子供の園30年のあゆみ—あいされるこども』発行

S82

1973(昭和48)年からの園舎



S83

1974(昭和49)年 小象さんがやってきました(花組の赤ちゃん)



S84

1977(昭和52)年プール遊び、スイカ割り



S85

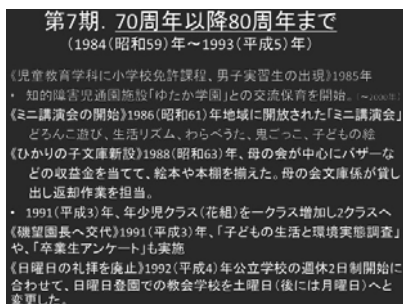
1978(昭和53)年ひな祭り楽団(2歳児星組)



S86

8-1. 第7期 70周年以降80周年まで

(1984 (昭和 59) 年 - 1993 (平成 5) 年)



S87

児童教育学科に小学校免許課程を設置し、1985(昭和60)年に、男子実習生が出現し、知的障害児通園施設「ゆたか学園」との交流保育を開始している。(～2000年)

1986(昭和61)年に、地域に開放された「ミニ講演会」として、どろんこ遊び、生活リズム、わらべうた、鬼ごっこ、子どもの絵を各テーマに開催した。

1988(昭和63)年、「ひかりの子文庫」を新設し、母の会が中心にバザーなどの収益金を当てて、絵本や本棚を揃えた。母の会文庫係が貸し出し返却作業を担当した。

1991(平成3)年には、年少児クラス(花組)を1クラス増加し2クラスとなり、磯望園長へ交代し、「子どもの生活と環境実態調査」や、「卒業生アンケート」も実施した。

1992(平成4)年に、日曜日の礼拝を廃止し、公立学校の週休2日制開始に合わせて、日曜日登園での教会学校を土曜日(後には月曜日)へと変更した。



雑巾ぬい

S88



ゆたか交流(1984~2000)
1984年より障害児通園施設との

S89



1985(昭和60)年 運動会タイヤ引き

S90



1985(昭和60)年 降誕劇

S91



1987(昭和62)年なつまつり

S92



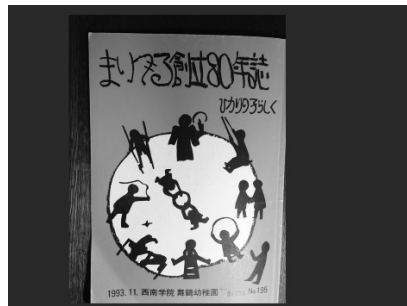
1990(昭和65)年頃やすらぎ荘
光組夏の合宿

S93



1993年(平成5年) 80周年記念 園児とともに祝う会

S94



S95

8-2. 30周年から50周年までの前期

(1980(昭和55)年 - 1991(平成3)年)

1983(昭和58)年から年1回の父母研修会を実施し、第1回「クリスマスの手作りおもちゃ」、以下「両親教育」などで継続している。

1986(昭和61)年バプテスト保育連盟研修会で「未満児の生活習慣」を発表する。

1987(昭和62)年3月に、中川のふ園長が退職にあたり、7月より、井上哲雄(-1991(平成3)年6月まで)が園長となり、主任はあざ上敬子が務めた。

1988(昭和63)年4月に、「わらべうた」を保育に取り入れ、9月に、父母の会を発足し、12月に小羊クリスマス(乳児クラス)を開始した。

5. 30周年から50周年まで

前期(1980(昭和55)年~1991(平成3)年)

- 1983(昭和58)年から年1回父母研修会(の第1回「クリスマスの手作りおもちゃ」、以下「両親教育」などで継続)
- 1986(昭和61)年バプテスト保育連盟研修会で「未満児の生活習慣」発表
- 1987(昭和62)年3月中川のふ園長退職、7月より井上哲雄が園長となる。(1991(平成3)年6月まで)主任はあざ上敬子
- 1988(昭和63)年4月「わらべうた」を保育に取り入れる。
- 9月父母の会発足、12月小羊クリスマス(乳児クラス)開始
- 1990(平成2)年「わらべうた」の研修、11月コダーイ芸術研究所(福岡)で公開保育実施、後に1993(平成3)年より同研究所(東京)渡辺幸子を、1997(平成9)年以降、ハンガリーの心理学者セアウェイ・ヘルミナを講師に年1回の勉強会をもつ。
- 1991(平成3)年2月父母の会主催バザー始まる。

S96

1987(昭和62)年今宿野外活動センター 年長児合宿



S97

1988(昭和63)年プール開き(3歳以上児)



S98

1988(昭和63)年さみどりこどもまつり (職員によるハンドベル)



S99



S100



S101



S102

1990(平成2)年に、「わらべうたの研修」、11月に、コダーイ芸術研究所(福岡)で公開保育を実施し、後に1993(平成3)年より同研究所(東京)渡辺幸子と、1997(平成9)年以降、ハンガリーの心理学者セチュイ・ヘルミナを講師にし、年1回の勉強会をもつ。1991(平成3)年2月に、父母の会主催のバザーが始まる。

9-1. 第8期. 80周年以降90周年まで

(1994(平成6)年~2003(平成15)年)

1994(平成6)年に、井上哲雄園長へ交代する。

1996(平成8)~1997(平成9)年には、舞鶴幼稚園・早緑子供の園の課題検討委員会を発足させ、両園の将来的一元化を目指し、両園園長は院長が兼務し、副園長を両園に設置する方向性を検討し、後に廃止した。

1997(平成9)年7月から4年間、井上は舞鶴幼稚園の副園長となる。

2002（平成14）年4月に、再び新園舎を建築し、舞鶴幼稚園舎竣工により、早緑子供の園とつながった、共通のホール、子どもにやさしい園舎を目指し、2003（平成15）年には、福岡市から都市景観賞を受賞した。

男性保育者の登場とともに、幼稚園では現在、現役として2名を採用しており、保育所では、来年の2017（平成29）年には、歴代2人目を採用する予定。

未就園児クラス（ちびっこ）を開始したのもこの時期であった。

第8期 80周年以降90周年まで
 (1994(平成6)年～2003(平成15)年)
 《井上哲雄園長へ交代》1994(平成6)年
 ・1996～1997年舞鶴幼稚園・早緑子供の園の課題検討委員会 両園の将来的一元化を目指し、両園園長は院長が兼務し、副園長を両園に設置する方向性→後廃止
 ・1997(平成9)7月から4年間、井上は舞鶴幼稚園の副園長
 《再び新園舎建築へ》2002(平成14)年4月
 舞鶴幼稚園舎竣工。早緑子供の園とつながった、共通のホール、子どもにやさしい園舎
 ・2003(平成15)年福岡市から都市景観賞
 《男性保育者の登場》
 《未就園児クラス(ちびっこ)開始》

S103

1994(平成6)年頃やすらぎ荘
 光組夏の合宿

S104

夜須合宿保育
 やすこローラーすべり

川遊び 天狗登場

S105

舞臺劇 イエスマ あんじょう あめでう
 21

S106

こままわし

S107

どろんこ

S108



幼稚園入り口近くの木によく登りました。

S109



1998(平成10)年運動会のタイヤ引き

S110



S111

9-2. 30周年から50周年までの後期

(1991(平成3)年 - 1999(平成11)年)

1991(平成3)年7月に、堺太郎(現名誉教授)が園長(1993(平成5)年6月まで)に交代した。

同年の9月27日の台風19号によるプレハブ園舎の屋根崩壊の被害があった。

1992(平成4)年8月に、仮園舎解体後、新園舎を竣工する。

5. 30周年から50周年まで
後期(1991(平成3)年~1999(平成11)年)

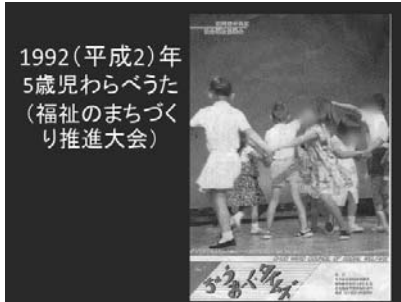
- 1991(平成3)年7月堺太郎園長に交代(1993(平成5)年6月まで)
- 9月27日台風19号の被害 プレハブ園舎屋根崩壊
- 1992(平成4)年8月(仮園舎解体後)新園舎竣工
- 1993(平成5)年中村和夫園長に交代(1997(平成9)年6月まで)
- 1997(平成9)年7月園長・副園長制 L. K. シート園長、坂口りつ子副園長に交代(2001(平成13)年6月退職)
- 1998(平成10)年定員増(60名→90名)
- 1999(平成11)年創立50周年記念式『早緑子供の園50年のあゆみーひかりのこども』発行
- 厚生省「保母」から「保育士」へ名称変更

S112

1991(平成3)年9月27日台風19号の被害
プレハブ園舎屋根崩壊

S113

1993（平成5）年に、中村和夫（現神学部名誉教授）園長（1997（平成9）年6月まで）に交代する。



S114



S115



S116



S117

1997（平成9）年7月に、園長・副園長制になり、L. K. シート園長（2001（平成13）年6月退職）、坂口りつ子副園長に交代した。

1998（平成10）年に、定員増（60名→90名）が許可となり、1999（平成11）年に、創立50周年記念式を挙行し、『早緑子供の園50年のあゆみ—ひかりのこども』を発行する。



S118

厚生省（現厚生労働省）は、「保母」から「保育士」へ名称変更したのもこの時期である

10-1. 第9期. 90周年以降100周年を迎える

(2004(平成16)年～2013(平成25)年)

2005(平成17)年～2011(平成23)年に、深谷潤園長へ交代する。主任教諭も、安武智里から横田哲子へ交代する。

2007(平成19)年に、西南学院大学人間科学論集に「保育現場における実践的カリキュラムの研究 西南学院—舞鶴幼稚園を中心に—」を掲載する。

2009(平成21)年から年少クラス(花組)を1クラス増やし、3クラスになり、2009(平成21)年からバザーを廃止し、「お買い物ごっこ」に変更する。

2011(平成23)年7月に、再び井上哲雄園長へ交代し、2012(平成24)年b)年から「餅つき大会」を保育の中での活動に規模を縮小する。

第9期. 90周年以降100周年を迎える

(2004(平成16)年～2013(平成25)年)

《延長預かり保育開始(どんどこクラブ)》

《深谷潤園長へ交代》2005(平成17)年～2011(平成23)年

《主任教諭の交代—安武智里から横田哲子へ》

・2007(平成19)年西南学院大学人間科学論集に「保育現場における実践的カリキュラムの研究 西南学院—舞鶴幼稚園を中心に—」

・2009(平成21)年から年少クラス(花組)を1クラス増やし、3クラスに

・2009(平成21)年からバザーを廃止し、「お買い物ごっこ」に

《再び井上哲雄園長へ交代》2011(平成23)年7月

・2012(平成24)年から「餅つき大会」を保育のなかでの活動に規模を縮小

《100周年に向けての取り組み、将来の課題》

S119



S120

将来の課題として、西南学院の2016(平成28)年の100周年より3年早く、2013(平成25)年には、舞鶴幼稚園の創設100周年に向けての取り組みが始まり、新しい独自の舞鶴幼稚園の保育活動への稼働となった。

10-2. 50周年から60周年まで

(2000 (平成12)年 - 2009 (平成21)年)

6. 50周年から60周年まで

(2000 (平成12)年～2009 (平成21)年)

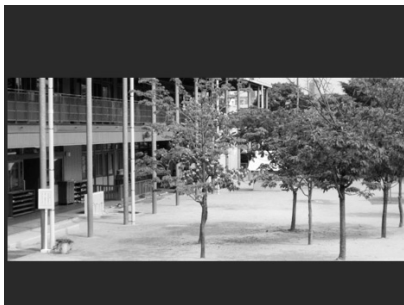
- ・ 2000 (平成12)年 村坂政利園長就任
- ・ 2002 (平成14)年10月園舎全面改築、新園舎での保育始まる。
- ・ 2003 (平成15)年4月岡村純子園長就任 (公募による園長)
- ・ 5月地域支援 (交流) 活動「保育園で遊ぼう会」開始、
- ・ 2005 (平成17)年『キリスト教保育』に、乳幼児保育の実践「0・1・2歳児～関わる～」掲載
- ・ 6月卒園生対象の「小中学生の集い」開始
- ・ 2006 (平成18)年舞鶴幼稚園との合同での花の日礼拝、感謝祭礼拝を開始
- ・ 2007 (平成19)年、4月寺園喜基園長、門田理世副園長 (2008年6月まで)に交代、
- ・ 2009 (平成21)年創立60周年記念式『早緑子供の園60年のあゆみーひかりのこども』発行
- ・ 2010 (平成22)年4月和佐野健吾園長就任 (小学校校長との兼任)

S121

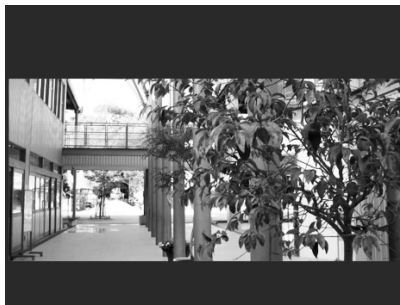
2002 (平成14)年からの園舎



S122



S123



S124

2000 (平成12)年に、村坂政利 (元西南学院中学校長) が園長に就任した。

2002 (平成14)年10月園舎全面改築、新園舎での保育が始まる。

2003 (平成15)年4月に、岡村純子園長が就任した。(公募による園長)、5月地域支援 (交流) 活動として、「保育園で遊ぼう会」を開始する。

2005 (平成17)年『キリスト教保育』に、乳幼児保育の実践「0・1・2歳児～関わる～」が掲載される。6月に、卒園生対象の「小中学生の集い」を開始する。

2006 (平成18)年には、早緑子供の園と舞鶴幼稚園との合同での花の日礼拝、感謝祭礼拝を開始する。



S125



S126

2007(平成19)年、4月寺園喜基(神学部名誉教授)園長、門田理世副園長(2008(平成20)年6月まで)に交代した。

2009(平成21)年には、創立60周年記念式を挙行し、『早緑子供の園60年のあゆみ—ひかりのこども』を発行した。



S127

2010(平成22)年4月和佐野健吾(元西南学院高校校長)園長就任(小学校校長との兼任であった)。

現在、パークレー院長が兼任しているが、両園の園長制度(クリスチャン条項・園からの推薦者を人間科学部教授会(児童教育学科等)が承認する等)による選出方法と人選が困難であったが、両園の保育現場の経験者から園長が承認されることが長年の念願であった。今回、舞鶴幼稚園の場合、保育現場から主任教諭の横田哲子が園長に承認されたことは画期的な事であり、2017(平成29)年より就任する予定である。

幼稚園・保育所の園舎新築(2002年11月完成)

舞鶴幼稚園
舞鶴幼稚園は、1913(大正2)年に、創立された。福井市内では、最も古いキリスト教主義の幼稚園です。2013年10月まで1950(昭和25)年に学校法人西南学院の幼稚園となった。

キリスト教保育を通し、思いやりの心を培いながら、個性が花開く女の子を、生きていく力を育む保育を実践


※舞鶴幼稚園と早緑子供園(保育所)の新園舎がこの種完成しました。この園舎は、音楽のホールに隣し、両園の往来が自由にできるように設計されており、中央に大きなホール(センターホール)やグラウンドなど広々とした共有スペースがあるのが特徴です。

◎園児数160人 ◎教員数15人
◎小園有数4,935人
*2009(平成21)年4月1日現在

早緑子供の園
早緑子供の園はこどもたちが長閑に生活する場所であり、家族的な安楽した生活を送るための「楽しい生活の場」でありたいと願っています。早緑子供の園は2009年6月に創立60周年になりました。

◎園児数103人 ◎保育士数14人
◎卒業生数770人
*2009(平成21)年4月1日現在

S128



舞鶴バプテスト教会は、この地にあった西南学院大学(現大福)児童教育科チャペルで、1955年(昭和30年)4月に礼拝を始めました。児童教育科長・舞鶴幼稚園長福永津義先生と、本園園長高橋さやか、キヤベイト理事高橋のぞみ(現園長)の3名、高橋バプテスト教会が主体、1993年に本園の完成(新・児童の建物)・幼稚園を建設しました。

福永津義と高橋さやか 母と子の西南学院への貢献

福永津義は、熊本県に生れる。父徳永豊昭は、熊本女子学校の創業者、長崎活水女子学校・幼稚園副園長卒業後、福井市栄冠幼稚園主任、福永省徳牧師と結婚後、1926年(大正15年)、旭川に恵慈幼稚園を設立。1940年(昭和15年)西南学院幼稚科専攻主任を務め、文部省教員養成所副所長。1941年舞鶴幼稚園長就任。1942年福井県佐藤高等学校(財団法人)名譽教授。1944年早緑幼稚園長就任(後の児童園・子供園)1950年学校法人西南学院合併、西南学院大学短期大学部児童教育学科教授。1962年西南学院理事長・65年院長就任。その後は、福井市に生れる。兵庫県立第二神戸女子学校、西南学院幼稚科卒業後、5名の子供を産み、福井県児童文化学校教師、西南学院大学講師、助教、教員を務め、福井女子短期大学教授。1985年活水学院理事長。1994~1998年3月理事長。西南学院短期大学名誉教授。

S129

老朽化した舞鶴幼稚園と早緑子供の園の両園は、2002(平成14)年に新園舎が施行され、ホールの共有スペースとする施設上の幼保一体化による新園舎の同一施設内に同居することになった。今回の新園舎の完成に伴い同一敷地内の西側に位置していた保育所側の園舎・園庭と東側に位置していた幼稚園側の園舎・園庭を2分していた白い垣根のフェンスは取り除かれことは良かったが、同じ屋根の下で保育を受ける両園の園児たちにとって、一元化の道は遠くて、険しそうである。交流保育やホールでの活動を通して、自由に交える機会が増えることを信じ、全国の指導的立場からモデル園になり、まずは、福永津義と高橋さやかの母と子が築いてきた礎である西南学院の保育の原点に戻り、今一度、幼保一元化の道への挑戦をしてほしいと願っている。



西南学院大学の創始者
C.K.ドジャーによって、1922年、大正11年に設立されたプロテスタント系バプテスト派教会
*第一幼稚園・リリア・ア・ホーム協力施設

西南幼稚園は、1953年(昭和28年)
西南学院バプテスト教会付属幼稚園として「母と子のキヤベイト」という親りのもとに設立されたキリスト教保育による幼稚園。

キリスト教は大きく、カトリック教会、キリシヤ正教会、プロテスタント諸教派に分けられる。プロテスタント諸教派は、16世紀の宗教改革をきっかけに、カトリック教会から分離し、それぞれを築いたものです。プロテスタント教会の主な教派としては、バプテスト、組合(会衆)、ルター、長老(改革)、メソジスト、聖公会(キリスト教教会)など。

1982年宗教法から学校法人に変更認可
2010年新園舎完成

S130

V 「平成の保育：第三波」をどう乗り越えるのか

グローバル化が進み、多種多様な選択肢の中、世界経済による各国間の競争が激化していく今日、保育においても、教育改革への挑戦となった明治維新から始まった「明治の保育：第一波」、敗戦からの教育復活への挑戦となった戦後の「昭和の保育：第二波」、そして、今日の教育淘汰への挑戦となる未来への投資となる「平成の保育：第三波」をどう乗り越えるのかが大切な選択の道となる。

明治初期の東京女子高等師範大学（現お茶の水大学）附属幼稚園のように、ヨーロッパ（特に、ドイツ）から指導を受けた先駆的な外国人教師によって、保育思想や保育内容・保育方法（フレーベルの恩物等）等が導入されたように、明治初期から敗戦前後にかけては、欧米からの宣教の手段の一環として導入された。

アメリカ宣教師らによって設立された幼稚園（保育所的機能は教会での支援による婦人会によって補完されていた）は、多くの困難を克服し、日本の保育の源流となり、保育者養成を通して、現在の幼稚園・保育所・認定こども園の礎に影響を与え受け継がれてきた。

例えば、関東圏では、桜井女学校の前身の英女学家塾（創設者・櫻井ちか（1855（安政2）年 - 1928（昭和3）年）は、1876年（明治9）年に創設され、後にアメリカ長老会に経営が移管され、1879（明治12）年に高等小学科、そして、1880（明治13）年に、日本で最初の私立幼稚園を設立し、1884年（明治17年）にメアリー・トゥルー（1840 - 1895）がキリスト教幼稚園の保姆養成のため、桜井女学校に幼稚保育科を設立している。

また、関西圏では、広島女学院の前身の広島女学会（創設者砂本貞吉：1856（安政3）年 - 1938（昭和13）年）は、米国南メソジスト教会の協力を得て、1886（明治19）年に創設され、1895（明治28）年に全国で2番目の保姆養成科ができ、その後、1908（明治41）年に保姆師範科（その後、1921（大正10）年にランバス女学院）に改称し、1920（大正9）年に、専門部（英文科、家事科、師範科）となり、1932（昭和7）年に広島女学院専門学校・1949（昭和24）年に新制広島女学院大学となる。

一方、ランバス女学院は、神戸女学院大学の前身である神戸ホーム、聖和大学の前身である神戸女子伝道学校のルーツとなる1880年創立の組合派神戸女子神学校（創設者ジュリア・E・ダッドレー（1840-1906）とマーサ・J・パローズ（1841-1925））、1888年創立のメソジスト派ランバス記念伝道女学校（創設者メアリー・I・ランバス（1832-1904）、1895年創設の広島女学校師範科（創設者ナニー・B・ゲーンズ（1860-1932）の三校が源流とし、1941（昭和16）年に聖和女子学院となり、「聖なる和合（Holy Union）」と呼ばれている。学制改革により、1950（昭和25）年に聖和女子短期大学、1964（昭和39）年に聖和女子大学、1973（昭和48）年に幼児教育学専攻としては全国初の大学院を開設し、2009（平成21）年に関西学院（創立者ウォルター・ラッセル・ランバス（1854-1921））と合併し、関西学院大学教育学部となった。

歴史を遡ると頌栄や聖和の保育者養成は、広島と神戸との関係が深く、幼児教育においては、今日に至るまで、キリスト教布教との関係が深く、広島大学や神戸大学の影響が大きく及ぼしてきたと考えられる。

このことは、九州圏においても同様であり、キリスト教の保育者養成校としての西南学院（M. B. ドージャー（1881-1972）：米国南部バプテスト）や活水学院（エリザベス・ラッセル（1836-1928）：米国メソジスト監督教会婦人外国伝道協会）等の果たしてきた役割は大きく、幼な子のためのキリスト教保育の普及とともに、保育の源流として脈々と流れる思想との繋がりがあ

Ⅵ 保育者養成における幼保一元化への取り組み

昨今の日本政府の保育政策として、超高齢化時代に向けての少子化対策が挙げられてきたが、特に、最大の関心事は、労働力の確保の視点であり、将来の子どもの教育環境の向上による人材確保だけでなく、母親への子ども・子育て支援による保育環境の整備や保育力の充実が緊急に求められ、女性の社会進出と労働への条件を拡大することが重要な課題である。さらに、国際化の名において、労働賃金の安い海外からの労働者を奨励しており、近未来的な取り組みとしては有効かもしれないが、子ども達を第一義にした未来永劫への継続的・充足的な保証とは言えないであろう。

保育所・幼稚園の違い

	保育所	幼稚園
所管	厚生労働省	文部科学省
法律上の位置付け	児童福祉施設	学校教育施設
対象児童	保育に欠ける0歳～就学前まで	満3歳～就学前まで
保育時間	原則1日8時間 延長保育もある	1日4時間が標準 預かり保育もある
職員配置	3歳児20人に対し保育士1人 4・5歳児30人に対し保育士1人	1学級(35人以下)に 教諭1人が原則
目的	日々保護者の委託を受けて、 保育に欠けるその乳児または幼児 を保育すること (児童福祉法第39条)	幼児を保育し、適当な環境を 与えて、その心身の発達 の助長をすること (学校教育法77条)

S131

保育所と幼稚園と認定こども園との比較表

	保育所	幼稚園	認定こども園
所管	厚生労働省	文部科学省	厚生労働省
法律上の位置付け	児童福祉施設	学校教育施設	児童福祉施設
対象児童	保育に欠ける0歳～就学前まで	満3歳～就学前まで	0歳～就学前まで
保育時間	原則1日8時間 延長保育もある	1日4時間が標準 預かり保育もある	0歳児は1日8時間以上 3歳児以上は1日4時間以上
職員配置	3歳児20人に対し保育士1人 4・5歳児30人に対し保育士1人	1学級(35人以下)に 教諭1人が原則	0歳児は保育士1人以上 3歳児以上は教諭1人以上
目的	日々保護者の委託を受けて、 保育に欠けるその乳児または幼児 を保育すること (児童福祉法第39条)	幼児を保育し、適当な環境を 与えて、その心身の発達 の助長をすること (学校教育法77条)	0歳児は保育に欠けるその乳児を 保育すること 3歳児以上は幼児を保育し、 適当な環境を与えて、その心身の 発達を助長すること (児童福祉法第39条)

S132

保育所と幼稚園を比較すると、制度化の違いだけでなく、歴史的な成り立ちの背景や組織の持つ社会的な思惑が異なっている。認定こども園に移行するかどうかは、政府の財政面の保障があるかどうか最大の関心事であり、保育の進むべき道の大きな曲がり角の分岐点に立たされているといっても過言ではないであろう。

認定こども園を推進する現在では、個人立や宗教法人立の場合、幼稚園（文部省→文部科学省）は学校法人立、保育所（厚生省→厚生労働省）は社会福祉法人立に移行するように求められていた昔とは違い、運営する法人の規制が緩和になり、認定こども園（内閣府）等の運営母体は、NPO法人や企業等の参入ができるようになったことが進歩と言えそうだが、保育力の低下や保育の質を保てるか危惧される。

このことは、認定こども園への一本化への政府の保育政策としても思惑は外れ、従来の保育所・幼稚園が残り、新たな認定こども園の中でも、幼保連携型・保育所型・幼稚園型・地方裁量型の4つのタイプに分かれ、幼保一体化どころか、現行の保育所と幼稚園の2タイプから6タイプへと増えたことになり、残念な結果となった。

しかしながら、大多数の認定こども園の幼保連携型にも見られるように、真の幼保一元化ではなく、同一敷地内の保育所と幼稚園の2つ園舎が建ち並ぶか、同一施設内に共有するゾーンが存在しているが、実際には保育所エリアと幼稚園エリアに分けている幼保一体化に止まっている点が類似していることを見逃してはいけない。

したがって、この度の認定こども園（幼保連携型）の目指すべき方向は、守屋光雄が提唱した保育一元化構想の北須磨保育センターの実践に学ぶ必要がある。現行の制度上や監査のための保育施設の区分は存在するが、保育所の長時間保育児と幼稚園の短時間保育児として、午前中は長時間保育児と短時間保育児がシャッフルすることにより、同じ保育室において、同じ保育理念の基に保育活動を共有化し、午後からの短時間保育児が家庭に帰宅した後、長時間保育児は、居残り組や延長保育児とともに、有効に施設を含む保育環境を活用することを目指すことが重要である。

再考：幼保一体化・幼保一元化・保育一元化

- ・ 1947年幼稚園と保育所は機能と目的を異にするものとして二次的に制度化された。
- ・ 幼保一元化とは、小学校に入学する前の幼児が、文部科学省と厚生労働省の異なる所管でのもとで保育を受けていることに対し、両者が一体化するように保育制度の改革を求め、これを改めるような主張である。
- ・ その背景として、幼稚園も保育所もどちらも就学前の幼児の保育を目的としているため、すべての幼児の教育を受ける権利を平等に保障するために、現在、少子化で入園者が減少していたり、預かり保育を実施している幼稚園と、待機児童が多い保育所とが互いの「個性」を補完しあう試みでもある。

S133

幼保一体化と幼保一元化について☆

- ・ 幼保一体化とは、
施設の形態の問題
- ・ 幼保一元化とは、
保育所・幼稚園制度のあり方の問題
- ・ ※幼保二元化制度でも、一元化制度でも、
幼保一体化施設は存在する。

S134

近年の少子化対策に見られる子ども・子育て支援に関係する行政・組織の合理化・一本化に伴う子育て・保育経費の削減を前提とした制度・施設上の幼保一体化から本来の異なった制度や両親・保護者の社会的立場の違いから生じた子どもの成育環境の違いを打破するための幼保一元化への回帰であり、さらに、子どもの真の発達を保障することを第一義に考え、保育そのものの望ましい在り方を見直した子ども中心の保育一元化の道への挑戦であることを再認識することにより、望ましい保育活動の在り方（遊びの保育と生態幼児教育等）の実践を通して、保育学の概念（保育哲学・保育理念・保育定義）を理論的に理解しなくてはならないであろう。

Ⅶ おわりに：前編を閉じるにあたって

西南学院における保育者養成機関の設立時に見られた保育所と幼稚園と同一敷地内に、保育者養成機関の校舎の存在は、園児と保育者志望学生との交流が日常的に実施でき、保育現場との協力体制を構築することにより、子どもにとっても最適な保育環境づくりの基礎となっていたと考えられる。

現在、西南学院大学の保育者養成機関と西南学院の附属園（保育所・幼稚園）は、保育・教育実習での協力園ではあるが、別の敷地内であり、距離的にも遠いことから交流する機会が少なくなっていることが問題とされるであろう。

しかしながら、乳幼児から幼年期を対象とし、「保育学」・「乳幼児教育学」を中心とした学際的な研究分野である「子ども学」・「応用健康科学」を専門分野とするため、「融和・融合保育」を提唱してきた経緯がある。これまで、大学院の指導教官であった「保育学」を提唱した兵庫教育大学大学院故守屋光雄元教授の保育遊びの実践・兵庫教育大学大学院原田碩三名誉教授の提唱する「幼児健康学」による健康生活づくりの理論・甲南女子大学故水谷英三元教授の幼児体育遊びの指導法と、それぞれの領域では、『理論と実践の両立』を試み、実践的・実証的なアクションリサーチによる「融合保育」を取り組んできた。また、保育現場に出向き、子どもの健康に関する調査研究をしながら、幼児体育遊びや保育指導を通した直接的な園児への現役指導により、「融和保育」の構築を目指し、現在まで約45年目になる。

したがって、本研究の根底に流れる保育現場との繋がりを重視してきたことが幸いしたといっても過言ではない。

現在は、保育・教育・福祉・医療現場における保育者・教育者・指導者のための研究指導・研修活動を中心に、国内外における講演会・講習会の講師として啓蒙活動にも積極的に取り組むことにより信頼関係を深めながら、保育者養成校における保育現場との実践型交流授業を推進してきたことは、教育と研究活動の融合ができ、大学での授業を通しての長年継続してきた園見学・交流授業だけでなく、社会的背景の移り変わりにより、今日では、数多くの卒業生を、保育・教育現場に送り出してきたことから、現役学生の演習（卒業研究指導を含む）活動にも積極的に取り組めることが可能となったと確信している。

特に、最近では、隣接の西南教会が設立した西南幼稚園（学校法人）をはじめ、近隣の高取保育園（社会福祉法人）・養巴幼稚園（宗教法人）などの保育所や幼稚園等との協力体制を構築することに努めることにより、保育・教育現場における円滑な実習や研修の幅を持たすことが可能となり、ここ数年、大学の北隣の福岡市立の西新小学校と近隣の福岡市立百道小学校での生徒との交流授業を積み重ね、2010（平成22）年に私立西南学院小学校が設立できたことにより、さらに、小学校の教育実習や研修の機会が増え、継続的に乳児期から幼年期にかけての保育・教育効果とともに、保幼小連携による保育者養成にとっての大きな収穫が得られることができたと自負している。

したがって、保育者養成機関における保育現場の果たす役割は大きく、特に、保育・教育実習における協力園とは緊密な関係が必要であり、附属園（校）や協力園（校）が隣接し、実践型交流授業や研修の実施が可能となることは、保育者養成機関の学生や指導者にとっても、保育現場の園児や保育者にとっても、保育・教育における相乗効果を生み出すきっかけとなることが期待でき、制度面からみた保育施設（組織と器）だけの幼保一体化の物的ハード面の変革だけではなく、幼保一元化の改革に関しては、専門的異業種の人材（保育者志望学生も含む）の登用による人的ソフト面の改善を優先することが望まれ、地域社会に根差した保育現場と保育者養成校との連携を忘れてはならないであろう。

【参考文献】

- 『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年
 『長老・改革教会来日宣教師事典』新教出版社、2003年
 高橋昌郎『明治のキリスト教』吉川弘文館、2003年
 小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師』東京大学出版部、1992年
 永井優美『近代日本保育者養成史の研究—キリスト教系保母養成機関を中心に—』風間書房、2016年
 湯川嘉津美『日本幼稚園成立史の研究』風間書房、2001年
 前田美和子『＜研究ノート＞N. B. ゲーンズの来日のきっかけについての一考察』、神学研究、61：153-164、2014年
 瀬戸毅義『C. K. ドージャーの祈り「天の父よ、これが現在の状況であります…」—その日付と背景』
 原真和『関西学院にとっての聖和史

① 一四人の創立者・② 一西宮聖和キャンパスの由来・③ 一大阪のランパス女学院』、学院史編纂室便り、2001年